



夢のまた
夢

川崎ゆきお

「一日が暇でしょ」

「いや、なんやかんやで一日が終わりますよ。早いです」

「一日、何をしていますのですか。僕もやることがない隠居なので、聞いてみたかったのですよ」

「そうですねあ、これと言ってやるようなことはないので、何をして過ごせばいいのか、いろいろと試したことを覚えています」

「僕も試している最中ですよ。それなりに充実した一日としたいですからねえ。しかし、仕事はしておりませんから、メインがない。趣味を作るにしても、凝ったことはできない。多少は楽しめますが、それ以上の伸び代がないというか、興味が徐々に薄らいでいき、尻を割ります。まあ、それらのことはやらなくてもいいことなので、自分に対しての説得力もない。ケツなど割り放題ですよ。むしろ、金のかかる道楽などしてと、家の者に文句さえ言われますしね」

「家事はしないのですか」

「手伝いはたまにしますが、まあ、あまりやりたくない」

「私も最近まではそれでしたよ。余暇時間の過ごし方じゃなく、全部が全部余暇ですからなあ。だから、余暇じゃなく、余生ですよ。この余生、できれば一日一日充実したものにしたい」

「それぞれ、それぞれですよ。是非伝授願いたい」

「聞きますか」

「怪しいことじゃないでしょうかなあ」

「ゲームです」

「トランプとか」

「それでもいいのですが、一人で七並べや、ババ抜きを試してみなさい、すぐにしらけてきますよ。メインにならない」

「いや、一人でできるトランプもあるでしょ。手品でもいいし」

「でも、凝った趣味はすぐに飽きるのでしょ」

「ああ、そうでした。飽きると言うより、うまくできなくなり、面白くなくなるだけです。で、あなたが言うゲームとは、どのような」

「テレビゲームでも何でもいい」

「古いですねあ。今は携帯ゲームやスマホのゲームでしょ」

「おお、やっておられますか」

「孫がやっています」

「パソコンはありますか」

「あります」

「使えます？」

「会社で嫌々ながら覚えて、エクセルもワードも使えますよ。パワーポイントも。でも、退職してからは使いようがない。家族にプレゼンするわけにもいきませんしね。だから誰にも見せない日記をエクセルで書いてましたがね」

「ワードじゃなく」

「はい、エクセルの方が見晴らしがいいんです。検索やソートなんかも素早いですしね」

「じゃ、パソコンのオンラインゲームがあるでしょ」

「ありますなあ」

「あれのRPGものをやり出してから、私、一日が充実するようになりました」

「え、何ですか。もう一度」

「だから、モンスターを倒してレベルアップしたり、別の町へ行ったりするやつです。どんどん強くなりますが、敵も強くなります」

「それで、一日遊んでおられると」

「最近はこれです。これですごく一日が安定しましたよ。メインができた。やることができた。やっていないクエストが溜まっていましてねえ。それを果たすため、冒険に出ないといけない。忙しいったらありゃしない」

「ほう」

「同じように冒険している人に話しかけられたり、さらに一緒に狩りをしたり、同じクエストをチームを作ってやっつけたり、この場合、モンスターが強くなります。注意が必要です。一人だと弱いモンスターも、チームで請け負ったクエストでのモンスターは強いのです。これをエリートモンスターと言ってます。雑魚キャラでもエリートなので、これがまた強い」

「もう、ついて行けません」

「はいはい」

「しかし、そんなバーチャルなことをやっても、何も起こらないでしょ。何も残らないし」

「一日が充実します。いい状態で冒険に出たいので健康管理にも注意するし、生活も規則正しくなります。一日の芯ができます。一本筋が通ります。おかげで、他のことをするときも、軸がしっかりとしているのでしっかりできます」

「軸のある一日ですか」

「そうです。軸は必要です」

「しかし、そんなゲームをやっても将来役立たないでしょ」

「いや、既にその将来に今いるわけですから、今が将来なんですよ」

「ああ、しかし、老後に役立つような」

「今が、老後じゃないですか」

「ああ、その最中でしたねえ」

「充実すれば、何でもいいのですよ」

「そうですねあ、いいの、見つけましたねえ、あなた」

「おかげで、一日一日しっかり生きていますよ」

「ああ、それぞれ、私もそんな軸が欲しいです。バーチャルでもいいので。それにボケてきたら全部バーチャルになりそうですしね」

「難波のことも夢のまた夢」

「ああ、太閤秀吉の辞世の句ですね」

「現実も、夢のまた夢ですよ」

了